



Title	大阪外国語大学フランス語専攻における既提出卒業論文からみた日本の教育の問題点：デカルト精神のアンカルナシオン(血肉化)教材,すなわち真の国際人育成教材としての既提出卒業論文
Author(s)	和多, 則明
Citation	études françaises. 2005, 37, p. 105-158
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪外国語大学フランス語専攻における既提出

卒業論文からみた日本の教育の問題点

——デカルト精神のアンカルナシオン（血肉化）教材，すなわち
真の国際人育成教材としての既提出卒業論文——

和 多 則 明

——目 次——

はじめに

(1) 卒業論文の個別的分析

- ① フランス現代史関係卒論
- ② 家族問題関係卒論
- ③ 現代社会思想関係卒論
- ④ フランス映画関係卒論
- ⑤ 外国人労働者関係卒論

(2) 卒業論文からみた日本の教育の問題点

- ① 主観的なことと客観的なことの混同
- ② 論文を書くための基礎訓練の欠落
- ③ 批判力の欠如
- ④ 論証力育成の不十分さ
- ⑤ 科学的精神の欠如

結論：学生達の卒論の教育的役割—デカルト精神形成と真の
国際人育成のために—

はじめに

本稿は、フランス語専攻において学生達が提出した卒業論文のうちの5本を科学や学問の立場から分析することによって、大学入学までの教育のみならず、大学入学後の教育、さらには国民教育全体にも関係する問題点を明らかにすることと、それら卒論の分析が持っている科学教育上の意味と、国際人育成上の意味を明らかにすることを目的としている。

本稿において例として用いたそれら5本の卒業論文は、筆者がこれまで担当してきた320本の卒論の中から可能な限りさまざまな研究分野を対象として無作為に選んだものである。作成時期でみると5本のうち4本は、昭和62年度以前のものである。というのは、平成に入ってから、筆者自身の指導姿勢の変化を含む様々な理由のため、卒業論文の指導がより体系化し、本稿で触れるような問題を含んだ卒論はほとんど提出されなくなっているからである。いいかえれば、本稿で扱う卒業論文5本のうち4本は、学生達がより自由に書いていた時期のものであり、それだけに時期的にはより古くなるが、日本の教育の状況、すなわち日本の教育によって形成される科学的精神の状況、を直接的に示しているものであると考えられる。更に、外大の場合には、語学以外の専門化が容易ではないことや、その学問的総合性のため学生の選ぶテーマが多様であり、その結果、既成の邦語専門的文献を参考にすることができず、資料やデータそのものに基づいて自力で卒論を作成することが多くなることから、専門的参考文献や知識から借りてきたものが卒論の内容と文章に反映されにくく、その分ありのままの（土着的または伝統的）科学的認識力や文章表現力が卒論に反映されている場合が多い。

なお、5本のうち1本だけは、平成期に入ってからのものである。その卒論は、体系的な卒論指導とは無関係に作成されたものであり、他の4本の論文が書かれた教育的背景がそれ以後も変化していないことを示唆する

ひとつの証拠としてあえて扱っている。

それぞれの卒業論文については公開についての同意を各執筆者から得ているが、批判的な検討の対象としているため、その著者名をあえて記していない。批判的な対象とはしているが、執筆学生個人が批判の対象ではなく、むしろ、学生達の考え方や表現方法に影響を与えた日本の教育が批判の対象である。なぜなら、問題としてとらえようとしていることは、それぞれの学生の、勉強の度合いや個人的日本語能力に関係することではないからである。実際、本稿で例として選んだ卒論に含まれている問題は、それらを執筆した学生達にのみ関係する問題ではなく、他の学生達すべてに共通する一般的問題である。その意味では、本稿で対象として選んだ卒論は、その当時の他のすべての卒論の中からまさしく偶然選ばれたいくつかの例にすぎない。また、本稿で対象とする卒論を書いた学生は文科系の学生であり大学時代の成績も優れており、日本語の表現能力のレベルは相対的に高いと考えられる。したがって問題は、学生達個人の日本語能力の低さによるものでもないといえる。加えて、それぞれの学生はその時点において卒論の完成のために情熱を持って十分な努力をしている学生であり、また、その当時の評価においてはその取り組む熱意と真摯さにより、高い評価を受けている。

本稿の最終目的はあくまでもそれらの個別事例をとおして、学生達の真摯な努力を十分に生かすことができなかった日本の教育のありかたに問題点と課題を見つけ出すことで、国民教育上の公的利益に貢献することである。

(1) 卒業論文の個別的分析

本章ではまず卒論を個別的に分析していき、それらの分析に基づいて次章で問題を一般化して把握する。

①フランス現代史関係卒論

次の文章は、第二次大戦下のフランスの政治動向を扱った昭和62年度以前の卒論の一部である。

序 論

本論では、第二次大戦を通じてのフランスについて論じていく。

まず第一部では、第二次世界大戦以前のヨーロッパから取り上げて、フランスの休戦までを論じていく。第一部では、特に次の三点について考察する。

まず第一に、なぜ『奇妙な戦争』が起こったのか。第二に、難攻不落と考えられていたマジノ線が、なぜ簡単に突破されたのか。第三に、軍部出身のペタンが、なぜ休戦を主張したのか。以上の三点を中心とした。

第二部では、ヴィシー政権について論じていく。この第二部では、特に『国民革命』と『対独協力』について論じていく。そして、最後に、ヴィシー政権の意義を考察していきたい。

第三部では、レジスタンス運動について論じていく。この第三部では、国内と国外の運動を中心に論じていく。特に、レジスタンス運動は、どのようにして生まれたか、どのようにして統一が進められていったかを考察する。そして、最終的にレジスタンス運動の意義を論じてみる。

本 論

第一部 第二次大戦の開始からフランスの降伏

1939年9月1日、ドイツ軍のポーランド侵入によって、第二次世界大戦の幕は切って落とされた。そしてその二日後の9月3日に、フランスはイギリスとともに、ドイツに宣戦布告したのだが、その宣戦布告も、ほんの

十日足らず前にイギリスとフランスの両国がポーランドとの間で調印したばかりの対ポーランド援助条約にもとづいて、両国ともしぶしぶ重い腰を上げたというのが実状であった。ドイツは、ベルサイユ条約を破棄して、次々とヨーロッパの国々を併合していった。ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニ、イギリスのチェンバレン、フランスのダラディエの四首脳が集まったミュンヘン会談では戦争で恫喝するヒトラーに、英仏は譲歩し、イタリアは黙認し、ドイツのズデーテン地方の領土取得を認めた。このような宥和政策は一時的に戦争の危機を避けることができても、侵略国の要求を増長させるだけだと考えられる。従って、このような戦争の危機が生じた場合、多少なりとも威嚇し、抵抗力があると相手に悟らせる政策の方が良いのではないかと考えられる。

チェコスロバキアを併合したドイツは、ポーランドに矛先を向けた。ドイツは、ポーランド回廊の割譲を要求したが、ポーランドはイギリス、フランスとの相互援助条約に支援を頼りにして拒否した。イギリス、フランスの両国とも戦争は好ましくはないが、これ以上のドイツに対する宥和政策は世界の国々の不信感を買うと感じたため、相互援助条約に調印したのではないかと考察できる。なぜなら、もしイギリス、フランスが本気でポーランドを助けるつもりがあるならば、特にフランスは、ドイツ軍がポーランド戦線に全力を傾けている間、ドイツ西部から侵入して、ルール地方にかなりの打撃を与えることができたはずである。もしそうなれば、ドイツは開戦時に東部・西部両戦線をもつことになり、あれ程広大なヨーロッパの諸地域を占領することは不可能であり、フランスもドイツによる占領という屈辱的な措置を受けるはずがなかったのではないかと考えられるからである。

序論の部分は、他の卒論とくらべると比較的よくまとめられている。し

かも、部分的にはあるが、「なぜ」という言葉を用いて原因分析への姿勢をみせている点が評価できる。他方、序論の部分における一番の問題点は、論文の目的が明確ではないところにある。三部からなる論文の概略については説明しているが、論文全体によって何を明らかにするつもりかという目的が欠けている。この卒論が提出されたときには、そのような指導は行なっていなかったが、現在では、序論ではできるだけ「この論文の目的は」というかたちで書くように指導している。「目的」という言葉を使うことによって、序論で書くべきことが自分自身にも明確に自覚される可能性があるからである。

論文の場合、序論において最も重要なことで、必ず書かなければならないことは、論文の目的であり、それは論文で論証しようとする問題を提示することである。それに対して、結論は序論で提示した問題への解答ということになり、その関係の中で、本論は結論に至る論証となる。しかし、起承転結というパターンは知っていても、論文のそのような構成と、序論で書くべきことについては知らない学生がほとんどである。実際、卒論を書き始める時期の卒論相談の内容でこれまで多かったのは、「序論では何を書いたらいいのか。」という質問であった。何よりも筆者自身がそのことについてどこでも教えられた経験がないし、ある時期まで序論で書くべきことについて明確な意識を持っていなかった。他の研究者がその論文を参考にする場合のことを考えると、論文の目的は、序論の最初か、またはできるだけ序論の中でも最初に近い部分に持ってくるべきであるといえる。なぜなら、目的を知ることによって、その論文の全文を読むか読まないかについて、論文の読み手が容易に判断できるからである。

次に、言葉の問題としては、論文の中で2回用いられている「意義」という言葉が問題を含んでいることである。というのは「意義」というのは、主観的であり人によって違う可能性が強いからである。たとえばある研究の学問的意義というのは研究者によってちがう主観的なことである

う。むしろ「影響」や「もたらした歴史的結果」という表現の方が客観的事実関係を示している意味では適当であると考えられる。

序論の中でもうひとつ問題になるのは、『奇妙な戦争』などが二重括弧に入っていることである。フランスの歴史に詳しくればこの括弧の意味が理解できるが、文章だけみたのでは注もついていないために、二重括弧の意味が理解できない。このような括弧の使い方や、さらにはこの論文には直接関係がないが、傍点や下線などの使い方は問題がある。読み手にその記号の意味を誤解なく一義的に伝えていないからである。どのような記号であれ記号を用いるときには必ず最初の使用のときに記号の意味や定義を説明することが必要である。このことは二重括弧のみならず一重括弧についても傍点や下線についても意味が理解しにくい場合には同じであろう。特に主観的感情による強調を託した記号の使用は、学術論文における客観性基準違反という意味では使用そのものに注意する必要がある。

次に本論の部分に入る。本論の最初の文は次のようになっている。

「1939年9月1日、ドイツ軍のポーランド侵入によって、第二次世界大戦の幕は切って落とされた。」

この文の中で科学や学問の立場からみて問題として指摘せざるをえないのは、「幕は切って落とされた」という表現である。歴史小説や歴史的エッセイの場合には問題がないが、客観的真理を追求する学問や科学においてこのような隠喩表現は適当ではない。一つの理由は、そのような表現が、現実や事実を正確にありのままとらえるのではなく、脚色された劇的なものとしてとらえさせることで、現実や事実を主観的感情によって歪める可能性があるからである。もうひとつの理由は、隠喩や直喩などの比喩的表現は別のものにたとえることで、違った解釈を生み出し、ある場合には誤解させることである。この隠喩に即して考えるなら、第二次大戦の幕

の厚さをどの程度に解釈するかは人によって異なる。レースのカーテンのように数ミリと解釈する人もいれば、1センチをこえる緞帳と解釈する人がいてもおかしくない。とすれば、どちらに解釈するかによって第二次大戦の開始の受けとめ方が違ってくことになる。科学の立場からもし、「幕」という言葉を使うとすれば、その厚さと重さを示さなければならない。

次の文にも同じような表現が用いられている。

「そしてその二日後の9月3日に、フランスはイギリスとともに、ドイツに宣戦布告したのだが、その宣戦布告も、ほんの十日足らず前にイギリスとフランスの両国がポーランドとの間で調印したばかりの対ポーランド援助条約にもとづいて、両国ともしぶしぶ重い腰を上げたというのが実状であった。」

問題は「しぶしぶ重い腰を上げた」という語句にある。この部分も隠喩であり同じ問題を含んでいる。

このような比喩的表現を卒論などの学術論文で使用してはいけないという問題について、授業中に学生達にアンケート調査を行なったことがある。その結果では、100人の学生のうち一人だけがそのことについて知っていた。であるから、ほとんどの学生はこれまでその問題をどこでも学んでいないのであろう。仮説として考えるならば、文学的美文や名文を賛美する日本語教育があるとすれば、このような比喩的表現の使用はむしろ積極的に評価されている可能性さえある。

同じ文の中で、「ほんの十日足らず前」という表現があるが、これも問題である。これは10日という期間に対する主観的・個人的評価とその強調を含んでいるからである。10日を短いと感じるか長いと感じるかは比較の対象がある場合を除いて、基本的には人によって統一見解に達することの

できない主観的問題であるから、卒論などの科学的文章からは削除されなければならない。同じような表現としてより頻繁に出会う言葉は、「大きい」、「小さい」、「著しい」、といった言葉であるが、これらについても問題としては同じである。しかし、この問題にしろ、先の比喻の問題にしろ、その頻発は学生達の責任ではない。というのは専門の研究者が書いた専門論文や一般向け書物の中にまったく同じ表現をみつけたすことができるからである。その意味では、この歴史関係卒論を書いた学生は参考図書を忠実に参考または模写しただけである可能性がある。

その段落における言葉としては、「恫喝」という言葉も問題である。なぜなら「脅迫」や「強要」と、定義がどのように違うかということを明らかにする必要があるとともに、現実には「恫喝」であったかどうかの証明が難しいと考えられるからである。

その段落の最後の部分の文章について検討してみよう。次のようになっている。

「このような宥和政策は一時的に戦争の危機を避けることができても、侵略国の要求を増長させるだけだと考えられる。従って、このような戦争の危機が生じた場合、多少なりとも威嚇し、抵抗力があると相手に悟らせる政策の方が良いのではないかと考えられる。」

この文章を構成している二つの文はともに「考えられる」という語句で終わっている。二番目の文の内容の根拠が最初の文の内容になっているが、しかし、最初の文の内容についてなぜそのように考えられるのかという最終的な根拠が示されていない。ここで根拠を示すということは、論証するということであるから、この文章には論証の姿勢が示されていないことになる。この学生の場合には、次の段落では、「考察できる。」と結んだあと、「なぜなら」というかたちで根拠を説明しているから、論証の姿勢

を全く持っていないわけではない。その意味では、他の卒論と比べた場合、まだ良いほうである。実際には卒論で、「思う」、「考える」、などの語句を使いながらその根拠を示していないケースの方が統計的には多いからである。しかし、根拠を明確に示して論証する姿勢も持つことは、卒論が感想文やエッセイにならないためにも不可欠のことである。なぜなら、自分の判断を示したあとで論証を考えるならば、論証ができないときにはそれが主観的感想やさらには幻想にすぎないことが逆に理解されるからである。科学というものが宗教や芸術と違ってその論証という方法に独自性があり、それこそが、人間の相互批判による科学的認識の発展を確保していることを考えるなら、学生達が卒論において根拠を示さない、すなわち論証を伴わない自分の感想だけしか書けないことは、日本の教育の致命的ミスを示している可能性が強い。

同じ段落の最後の「良い」という言葉についてもその価値観について問題があるが、この卒論においては例外的表現であるので、本節の⑤において詳しく扱うことにする。

根拠と論証に関係する問題として、この卒論の場合より広範囲にわたって問題であるのは、歴史的事実について書いていながら、それが事実であると考えた根拠がすべてにわたって示されていないことである。科学や学問の場合、原則的には一つでも事実認識がある場合にはそのことについて事実であると判断した根拠をつけないといけない。そうでなければ頭の中で作り上げられたフィクションとの区別が不可能となる。この卒論に即していえば、歴史小説を科学的に評価することはできないから、卒論の審査そのものが不可能となる。また、事実判断の根拠が、他人の書物の中にある場合には、注をつけなければ著作権法の理念への違反となる。卒論の場合にもその社会的位置づけからいって、事実判断の根拠が著作物にある場合には、注が不可欠であるといえる。にもかかわらず、これまでの筆者の経験では、学生達はそのことについてほとんど知っていない。その原因

のひとつとして考えられることは、大学に入ってからレポートが注なしのものでも合格してきたことである。しかし、卒論の問題や著作権法の問題を考えると、大学のレポート作成においても注を付けるトレーニングが必要と思われる。第二の原因は学生達が注のついた専門的論文を読んでいないことである。しかし、専門的論文を読み、それらを真似して注を付けている学生であっても、なぜ注をつけなければいけないかということについて正確に理解しているわけではない。ほとんどの場合は、専門論文を機械的に真似しているだけであり、注をつける理由については説明できない。第三の原因は、入手可能な何冊かの論文を書くためのマニュアルをみても、論証という意味で注が決定的に重要であることが十分に説明されていないことがある。しかもこれまでの慣例として、ほとんどの場合注は本文よりも小さい活字でつけられている。補足的説明などの注の場合にはそれでも良いが、事実判断の根拠を示す注内容はむしろ本文よりも重要である。それは裁判における証拠の決定的重要性に類似している。しかし、学生達は活字の大きさの違いのために注を二次的なものと勘違いしている可能性がある。

卒論のテーマによっては、資料や文献が少なく、1, 2冊の外国語文献や邦語文献に頼ってまとめざるをえないときがある。その場合に注をつけるとすれば、注のすべてにその1, 2冊の文献名がでてくることになる。そのような場合、学生は卒論の何ページから何ページまではこの本によってという一括注をつけることが多い。これは、著作権法との関係では盗用に近くなるため、最近では、面倒でも一つ一つに分割した注をつけるように伝えている。もっとも、そのように分割して注をつけても実質的には盗作に近いことはかわりがない。しかし、盗作に近いかたちでしか卒論を書けない場合であっても、そのように注をつけることが必要であることを学ぶこと自体が、大学教育として重要と思われるためそのような注のつけかたを強調する必要がある。知的財産権の問題が世界的に重要視されて

いる時代において引用注を正確につけることは、社会的に重要であるとともに、注を正確につけることで、自分が考えたことと借り物の部分の境界が明確になり、その結果自分の独創的思考の少なさを自覚することが可能になるという別のメリットがある。そしてその自覚は、現在の大学や学生に求められている独創性や創造性の開発育成の前提条件となるだろう。なぜなら、借り物を自分のものと錯覚しているときには独創性や創造性の必要性は自覚できないからである。

残りの部分では、言葉の問題としては、「あれほど広大な」、「屈辱的な措置」などにも問題がある。というのはこれらのとらえかたと表現は、人によって異なる可能性がある主観的なものであり、客観的真理を内容とする学問・科学の内容とはならない、すなわち卒論の内容とはならないからである。この例にみるような主観的なものについての理解の欠如は、ほとんどの学生の卒論に共通する最も重要な問題のひとつである。この点については別の卒論との関係でより詳しく触れる予定であり、さらには一般的な問題としても後述する。

②家族問題関係卒論

次のような、家族問題を扱った昭和62年度以前の卒論がある。家族問題は、学生達にとって身近な問題であることもあって、学生達が選択するテーマとしては、比較的多い方に属する。この学生の場合にも自分自身の現実の家族関係の問題がテーマ選択の動機となっており、それだけに情熱を持ってテーマを明らかにしようとしているが、その学生の卒論から、問題が含まれている序論と結論のみを抽出している。

序 論

現代は都市化が進み、人間同士の結びつきが浅くなっている。隣人とあ

いさつをかわさないどころか顔も知らないという人間関係、機械化が進み、乗り物に乗る・買物に行くなど外出しても一言も口を聞かずにすむ生活が、地方にも広がりつつある。

そういう中で人間の結びつきの根本である家族とは何かを特にフランスを中心に考えてみた。しかし大部分が統計資料等による現状あるいは特徴の把握に費やされてしまった。

ここでは家族の中でも特に夫婦関係に重点を置き親子関係はごく若干しか触れていない。これは『新しい家族社会学』（注、P. 4、培風館、1982年）の中にあるように、「夫婦関係と親子関係と、どちらがより基礎的か。夫婦関係よりも親子関係（母子関係）を基礎的とみる見方がある。インドの高級カースト、ナヤール族のように、夫婦関係の制度的位置づけを欠いている例や、アメリカの黒人社会やカリブ海沿岸諸国における夫婦関係の絆が事実上弱い例を研究した学者の見解に、それがみられる。しかし、これらはいずれも特殊な社会的経済的条件によって生じたもので、一般的に妥当する事実を示すとは言いがたい。元来、他の社会集団と比べて、家族にしか見られない機能は生殖である。生殖機能を担う夫婦関係が、生殖機能によって成立する親子関係より基礎的であるのは当然である。」という考えに基づくものである。

家族というのは夫婦の間に子供ができて成り立つのであって、親子が先にあって、その子の父親・母親が夫婦となるのではない。ということから、夫婦を重点的に考えるものである。（以下、省略）

結 論

第二章でも述べた様に、人間が一人で生きて行けない限り、「家族」あるいは小集団は存続する。しかし、その集団は家族である必要はあるのか。

例えばフランスでもスウェーデンのように事実婚が増加すれば結婚制度

がなくなり、一夫一婦制でなくなることも考えられる。事実婚では重婚を罰する、あるいは禁止する法律等が無いのだから、1人の男性が同時に複数の女性と関係を持ち、子供を持つことも、1人の女性が複数の男性と同時に「事実婚」の形をとることもありうる。1人が複数の家族、それも家族単位の中の基本である核家族に所属することになる。そうすると、「家族」は本当に人間の根本的なつながりとなるのか。

また、核家族は夫婦と子供によって構成されるものであるが、本論中でも述べたが、夫婦は契約による他人のつながり、親子は自然による肉親のつながりである。夫婦は親族となるが、離婚すれば赤の他人である。実の親子では他人となり得ないが、養子の場合は夫婦と同じ他人同士、紙切れ一枚のつながりとも言える。離婚届あるいは養子縁組の届けがなければ、他人と肉親、または全く他人同士の同居となる。家族とは、夫婦とはいったい何か。

序論で述べたように、夫婦が生殖機能によって家族、または男女、人間関係の基礎であるならば、現代では必ずしもあてはまらない。子供を持つことは男女の共同生活の大きな理由の一つとはなっているが、現代では昔のように強制されることはない。子供を産む・産まない、人数等はまったく夫婦・当事者である男女の自由選択である。

それでは夫婦の基本は何か。共同生活する理由で一番多かったのは愛情である。生殖機能を強制されず、女性も男性と同じように経済力を持ち、男女の役割がなくなりつつある現代では、純粹に愛情でつながれているということが、夫婦という関係を表す。親子関係とは異なり、当事者の意志による結びつきである。従って自由な形の結合でありながら、人間関係の根本となっているのが夫婦ではないだろうか。

最初の文は次のようになっている。

「現代は都市化が進み、人間同士の結びつきが浅くなっている。隣人とあいさつをかわさないどころか顔も知らないという人間関係、機械化が進み、乗り物に乗る・買物に行くなど外出しても一言も口を聞かずにすむ生活が、地方にも広がりつつある。」

科学や学問の立場、卒論の審査という立場からみると、この文の内容の問題点は、現代の人間関係についてのこの学生の認識の根拠がどこにあるかということである。科学や学問というのは、論証を不可欠のものとしているから、認識の根拠が必ず問われなければならない。もちろん、この文はこの卒論の序章の部分にあたるから、本論のところで論証されているならば問題はないことになる。しかし、現代の人間関係全体といった問題について論証することは、演繹的推論の場合を除いて困難である。しかもこの場合には、内容が具体的現実に関係しているため、演繹的推論もまた容易ではない問題であるから、この文の内容については論証することはほとんど不可能といえる。論証を欠如させた内容の場合は、それがどのような形で何について書かれていようとも、フィクションと区別できない。そのように考えるならば、この卒論の場合には、序章の最初の部分においてすでに科学や学問の立場や姿勢を否定していることになる。

問題を一般化していえば、時間的に長期にわたるほど、また空間的に広がるほど、また、その事実の集合の中に含まれる要素の数が多くなるほど、すなわち巨大仮説になるほど、論証は困難になるか、ある場合には不可能になる。なぜなら、証明すべき対象が増加するからである。これは、科学や学問における論証の問題について考えるときに論理的に出てくる結論である。逆にいえば、時間的に長期にわたるような現実や事実、空間的に広がった現実や事実、などについてどのような形で扱っているかという点に、その学生の科学的姿勢が表れるということであり、それは大学生の知性を証明する材料のひとつとなる。なぜなら、明確な論証根拠が無いこ

とについてあたかもそれが事実であるかのように書いたり、話したりする行為は科学的精神の欠如を示しているからである。

この学生が、このような文章を書いている原因は、一つには、この時点では学生達に授業でこの問題について明確に伝えていなかったことにあり、それは筆者の責任でもある。それとともに学生達が読む可能性のある大多数の書物の中にも、このようなとらえかたが見られるということが原因としてあげられる。出版されている書物で、しかも学問・科学と密接な関係を持っている書物の中にさえおなじようなとらえ方があるから、学生達がその影響を受けて卒論を書いても非難できないと考えられる。

なお、このような時間的に長期的で空間的に広い現実や事実について科学的に触れるためには、それが推論または推測による仮説であることを明示することが必要である。その基準に従うならば、上記のような文は「……という可能性がある。」というかたちで結ぶことが必要となる。ただ、より厳密な立場からいえば、逆の可能性の確率も50%であり、最終的にはどちらともいえないことになるから、書くべきではないともいえる。ただ、学生達のほとんどは、現実や事実についての断定と、推論や推測を区別して明示する力が不足している。であるから、こういう問題との関係で、仮説的表現の重要性について学生達に強調することには意味がある。このような巨大仮説の場合には推測や推論として認識し表現することが、学問・科学的には正確な方法であることを自覚することは、科学教育という立場からは重要な意味を持っている。なぜなら、論証が困難か不可能な巨大仮説を事実であると断定することは幻想の肯定であり、幻想を峻拒することこそが学問・科学であることからいえば、それは科学の否定となる。

以上のことに加えて、この最初の文では、書かれていることがおそらくは常識的で、場合によっては読み手に抵抗なく受け入れられる可能性があることが問題である。新聞や雑誌などの情報をもとにして書いていると思

われるが、しかし、この最初の3行に書かれていることを科学の文章にするためには、最初から困難な問題に直面することになる。「都市化」という言葉をどのように定義するか、「人間同士のむすびつき」とはどのように定義できるかといった言葉や用語の定義の問題がそうである。これらの言葉の定義は、言葉と現実や事実をつなげるために不可欠の作業であり、その後の論証の基礎を構成するものである。しかし、この学生だけではなくほとんどの学生の場合、言葉を定義することが必要であること自体についての認識が欠如している。

別の学生が卒論を書き終わったあとに述べた感想に、文章にすれば1行ですんでしまうことを論証するために50枚の卒論が必要であることが解った、という感想があるが、そのような学生の感想を基準にすると、この3行のような常識的でかつ巨大な内容の文章を言葉の定義とそれに基づく論証なしに事実と思い込んで書けることは、大学における科学教育の失敗を意味しているといえるだろう。

序論のそのあとの部分は、参考にした家族社会学の書物から引用しながら、家族関係を分析する視点を説明している。序論のこの部分は、他の学生達の卒論にも共通する問題を持っている。引用の仕方からわかるように、書物の中の他人の考えをそのまま引用して自分の考えとしている。このようなやりかたも、学生達に自由に卒論を書かせた場合に出てくる典型的なやりかたである。そこに欠けているのは、他人の考えに対して自分はどうように考えるのかという自分なりのとらえ方である。たとえば、他人の考えかたを批判的に検討するといったやりかたが欠けている。これが欠けている最も良い例は、何冊かの本を読んでまとめるレポート形式の卒論である。レポート形式の卒論が含んでいる問題は、創造性や独創性の開発の問題に密接に関係している。なぜなら、読んだ書物に書かれている現実認識や事実認識や推論をそのまま自分のものとしているのであれば、それは複数の他人をコピーした考えであり、自分の独創的考えは何も含まれて

いないからである。独創的な考えが他人とは無関係に生じる場合もありうるが、他人との関係において生じる場合も多いと考えられるから、独創性の開発には他人の考えが含んでいる問題点や誤りや不十分な点をみつけだすことができる力が不可欠となる。そう考えるなら、他人の考え方に会ったときにどのようにそれに対応するかが、独創性開発のための分岐点になるということになる。

たとえば、この論文で学生が引用している部分では、夫婦関係が親子関係よりも重視されており、書き手は親子関係が家族関係の中心であるケースを、特殊な社会経済的条件によって生じたもので一般的に妥当する事実を示していないと述べている。しかし、そこまで断定的にのべることができる根拠としては何があるかという問題に学生が気づき、そのことを調べ出したなら、この学生は、この引用部分の学説とは違った学説を立てることも可能になる。また、引用部分で「生殖機能を担う夫婦関係が、生殖機能によって成立する親子関係よりも基礎的であるのは当然である」と述べられているが、ここも批判的に検討すると問題が生じる。時間的にみると夫婦の生殖関係より親子関係の方が長いことや、幼児期インプリントの強さからかならずしも著者のいっているように当然ではない。日本の平安時代の家族関係について考えてもそのことがわかるだろう。さらに、動物社会における夫婦関係と親子関係についてなんらかの情報を持っているならば、その疑いは強まることになる。そのような批判的プロセスは、学生にとってもそれほど難しいことではない。自分で考えれば十分にできることである。にもかかわらず文章を批判的に読むことができないとすれば、その原因の一つは学生の心の中の権威主義である可能性がある。日本の社会が社会学者の分析のように「タテ社会」とであるとすれば、この可能性が現実性に変わる。もうひとつの原因は、文章を批判的に読むというようなことをこれまで一度もやってきていないことである。受験勉強を含めた日本の教育において、おそらくは教科書であれ参考書であれ無批判に憶えてき

たとすれば、その仮説は現実的だろう。

実際、以前、フランスの失業問題についての卒論を書いた学生が、ある大学の教授が書いた論文が、何回読んでも意味がわからないと質問にきたことがある。その学生がわからなかった原因は、その著者が書いている論理が完全に逆転して間違っていたからである。しかし、その学生はそのことに気が付かなかったのであり、その理由を本人に確認した結果では、その国立大学の権威への反応、すなわち権威主義的受けとめ方と、これまで受けてきた教育のあり方にあった。

そのような経験から、この10年間の授業では、社会的に一流大学とされる大学の研究者が書いたさまざまな文章を徹底して批判的に検討するということを行っており、最初何回か例を示したあと学生達に自由に発表させてみると、最初はできなかった批判ができるようになり、科学や学問の立場からみた問題点を見つけだすことがほとんど完璧にできるようになる。そのことから考えると、学生達は批判的にものごとをとらえる力を持っていないのではなく、これまでの教育において開発されていないだけであるといえよう。

序論の部分についての分析は以上で終えて、次に結論の部分の分析に移る。結論の部分は、五つの段落から構成されているが、そのうちの四つが疑問文で終わっている。また、結論の最後の文も疑問文で終わっている。結論というのは、序論における問題への答えであるから答えの部分に新たな疑問がでてくることは、結論であることと矛盾する。そういう意味でこの卒論の結論部分は問題である。他にも同じように結論部分に疑問文が置かれている卒論が複数あるが、この論文はその代表ともいえる論文である。

結論の部分が疑問文で終わっているということは、別の視点からいうと序論と結論が正確に対応していないという、より一般的な問題になる。そのような一般的問題の中には、たとえば序論で出した問題とは違った問題

に結論で答えているようなケースが含まれ、このような例も学生の卒論の中にある。

結論の部分に関する別の問題としては、本論で論証していないことを結論で述べているようなケースがある。これも論証という卒論の目的からみてルール違反となる。

結論をめぐる問題に関しては、学生達の置かれた状況を考えると無理がない面がある。一つは、時間に追われていて、序論を含めて全体を読み返し検討する時間も無く提出しなければいけないことである。1年かけて卒論に取り組んで、自分なりの問題を見つけたしていよいよこれからおもしろくなり、あと1年かけることができれば優れた卒論を書けるという時点で提出しなければならないことも、無理がないと思える別の理由である。この卒論の場合も、そのような状況が結論の部分に表れている可能性がある。ただ、現実にはやむなくそうなったとしても、卒論や論文というものの本来の原則を知っていたかどうかということが重要である。しかし、これまでの経験では、授業でそのことを伝えなければほとんどの学生達は、論文構成の原則というものを知らない。すなわち、日本の教育のどの局面でも論文構成の原則について教えられていない可能性が強い。

③現代社会思想関係卒論

次の卒論は、決して例外的な卒論ではない。この卒論は、参考文献が全く示されておらず、引用を示した箇所もない。それらのことからみても内容からみても、学生が、借り物や他人の文章のコピーではない自分自身の本来の力で書いている卒論であると考えられる。論文の場合、参考にした文献が専門的で優れた内容であるほど、学生達の卒論もそれを真似して表面的には優れた卒論となる。しかしそれは、科学や学問につながる学生の本当の力を示すものではない。そのような卒論の場合には、学生の本当の力は借り物によって隠されており見えにくくなっている。この問題は日本

の研究者の論文と科学的精神についての問題、すなわち科学的精神の土着化や血肉化の問題にも当てはまる可能性がある。

大阪外大の場合、大学の性格も関係して、学問的な専門領域への特化が他の大学にくらべて必ずしも十分ではないことから、学生が自分自身の本来の力で卒論を書くことになるため、この卒論のような例が多く出てくることになる。そしてそれらの卒論は、学生の本来の力、すなわち日本の教育が形成したありのままの力を示しているものとして貴重である。なお、この学生のフランス語の成績は他の学生と比べても優れており、そのことからいうと、この卒論を書いた学生は大学教育においては真面目な優等生であったといえる。テーマについても取り組む姿勢についても、下の文章の中で書かれている熱意は決して誇張ではない。

この論文も昭和62年度以前のものである。

はじめに

現在、わたしたちの暮らしは非常に豊かになったように見える。お金さえあれば欲しいものは手に入るし、冬には暖房、夏には冷房によって快適な生活が送れるようになった。このような良い面だけ見ていると、人間とはなんて優れた動物だと思ってしまう。しかし、実際、数々の問題が存在する。ガンなどの病気は、未だ私達の生命を脅かしているし、公害が発生し、生活環境が悪くなった地域もある。また道を車が我がもの顔で走りまわり、のんびりと歩くこともできない。また人心はのんびりしたところを失い、絶えず、セカセカ、イライラしているように見える。

しかし、何よりも私の心を憂えさせるものは、人類が滅亡の危機に直面しているということである。私はこのことを最大の問題と考え、大学の4年間を通してこれについて思索してきた。まず明らかにこの核戦争の危険の根元は、資本主義と共産主義の対立である。私は、その対立の原因と解

決法について常に思索してきた。

この論文は、その思索を集大成したものである。それは大学生活のまとめとして最もふさわしいと思えるものである。思索の中心点は「階級社会」にあった。なぜなら資本主義社会と、共産主義社会の相違点は階級社会の存在、不存在だと思われたからである。

私は思索を重ねるにつれ、それは少し浅はかな考えだったことに気付いた。共産主義社会にも階級は存在するのである。

また、個人には色々な考えかたがある。世間では左翼的思想傾向を良しとする風潮が、この西側の一員である日本にも、一部存在する。教科書の記述に、共産主義を理想的なものとしてあったり、ソ連よりの新聞があったりなどである。

だが一方では、共産党が孤立する状況がある。日本では共産党を除いた政治活動が一般化している。また、フランスでも共産党は内閣から姿を消し、社会党は共産党を排除する傾向にある。(そもそも、ソ連、東欧、中国などは、かつては社会主義国と言われたものだった。しかし、フランスに社会主義政権が誕生して以来、それらの国々は、共産主義国と呼ばれることが多くなった。それは、フランス型社会主義と明確に区別する必要が生じたからである。つまり、共産主義国とは共産党が一党で独裁し、将来、階級のない共産主義社会を目指している国々のことをさすようになった。)

また一方では、共産圏が広がろうとする傾向がある。それは主に、共産ゲリラというテロ活動によるものであり、特に発展途上国によく見られる。そしてそれは、資本主義圏と共産圏の敵対を激しくし、核戦争の危険を増大させている。

私には、階級なき社会は実現不可能に思われる。階級なき社会があったなら、それは幸せな人がいない社会になってしまうだろう。共産主義は、建前上、階級なき社会をめざしているところに欺瞞性があるように思われ

る。

私はまず、階級社会の歴史的発展を見、そしてその正統性を考察することにする。またその進展の法則性のようなものを見いだしたい。

すでにこれまでに触れた問題、すなわち論証が困難か不可能な巨大な現実認識の問題や主観的表現の問題については分析を省略する。また、現実や事実についての認識の誤りや、不十分な点については本稿の目的ではないので分析を省略する。この卒論に関して問題にしたいのは、書かれている内容の論理性である。

ひとつひとつの文については、あくまでも他の卒論と比較した相対的な問題であるが、意味不明の文や、主語が欠けている文がなく、わかりやすい論理的な文になっている。実際、意味がわからない長文や、主語が欠けている文や、文全体のかかり結びが間違っている文に出あうことは半数以上の卒論においてみられるからである。そのような現状からいうと、この論文の文は比較的よく書かれている方である。個別的な文にはそれほど問題がないにもかかわらず文と文との関係、すなわち文章の論理に問題があるのがこの卒論の特徴である。

最初の段落について見てみよう。最初の段落の3番目の文が「しかし、実際、数々の問題が存在する。」という文であるが、この文の中で「実際」という言葉をつなぐ先行の内容がみあたらないため、論理的意味をなしていない。その段落で、書き手からみた現代の文明に関する良い面と悪い面について触れた上で、次の段落に入っている。次の段落の冒頭は、「しかし」で始まっているが、前の段落の最後は悪い面について触れ、「しかし」のあとの文でも悪い面について触れているのだから、ここは論理的には逆接ではなく、順接となるはずである。ここで「しかし」を使う理由があるとすれば、最初の段落の良い面が意識されているときであろうが、

そのような関係は文章の構成としては無理があり、非論理的な文章構成となっている。

最初の段落につながるこの「しかし」で始まる文には別の問題がある。それは、内容的にみて最初の段落との関係が非論理的であるということである。その理由の一つは、「何よりも私の心を憂えさせるものは」と書いているが、「何よりも」と対応するような憂えさせることがらがそれまでの文章に示されていないため、なぜここでこの内容が出ているのかわからないことである。現代文明のマイナスの面については直前に指摘されているがそれは事実として指摘されているのであって、「憂えさせること」として書かれているのではない。もっとも著者の心理においてそれらは「憂えさせること」となっていると推測できるから、問題は、前の文章と後の文章が他人に理解されるような論理的つながりをもっていない、すなわち論証されていないということである。言い換えると主観的には論証されているが、それが客観的な文章表現となっていないということである。これが、書いている学生の文章表現力に起因するものか、より根源的な論証力に起因するものなのかということについて断定的結論は出せない。

もう一つの理由は、前の段落に書かれていることが日常的で具体的なことであるのに対し、この文では人類の滅亡の危機というより抽象的な問題に移っていることである。フランス語の文章の場合にも問題となる、言葉や語句の抽象度のレベルが違っていることが非論理性を生み出している例であろう。

その文と次の文のつながりには問題がないが、「まず明らかに」で始まる文については問題がある。「まず」という言葉が文章の内容からみて他の内容と関係づけられないからである。この「まず」は削除した方が論理的には良いにもかかわらずついているという意味で単に飾りの言葉である。

3番目の段落の中では、「思索の中心は」で始まる文までは論理的な問

題点はない。ところが、その次の「なぜなら資本主義社会と、共産主義社会の相違点は階級社会の存在，不存在だと思われたからである。」という文に問題がある。先の段落で、資本主義と共産主義の対立の原因と解決法について常に思索し、思索の中心は「階級社会」にあったとし、思索の中心が「階級社会」にあった理由や原因について説明しているが、その文においては「対立」という言葉が使われず「相違点」が使われているため論理的なつながりがなくなっている。なぜなら「相違点」が「対立」を生み出す場合もあるが、まったく逆の場合もあるためつながらないからである。

その次の「私は」で始まる段落は、内容的には前の段落に入れた方がよく、ここまでの三つの段落は一つにまとめた方が内容的な区別としては適当であるだろう。

その次の段落は「また」で始まっているが、この「また」には前の段落とのつながりがほとんどない。ありうるとすれば、「相違点」という言葉か、共産主義社会にも階級が存在することであるが、内容的にはつながりにくい。内容的には、共産主義にも資本主義にも階級という違いがあり、また個人による考え方の違いもあると言いたいのではないかと推論できるが、文章ではそのようなかたちにはなっていない。この「また」も単に飾りとして使われているといえる。

その次の段落は、「だが一方では」という語句で始まっているが、ここも段落の接続詞が論理的な意味を持っていない。というのは、前の段落で「一部存在する」と書いているから、「孤立」と両立するため、逆接とならないからである。この学生の卒論の段落の間の接続の問題は、決してこの学生にだけ限定された問題ではない。正確に計算したわけではないが、20%から30%の卒論において接続詞の使い方が間違っているか、意味にほとんど関係なく文頭に置かれているだけである。文の論理性という点からみて最も重要な役割を果たす接続詞の使いかたを、日本語教育で十分に学

んできていないという仮説を立てざるをえないだろう。

「また一方では」で始まる段落は、前の段落の内容と矛盾していると受けとめられる可能性がある。というのは、前の段落の「孤立」と「広がろうとする傾向」との関係が明確でないからである。前の段落のフランスでの状況の指摘は「孤立が強まる傾向」であるからなおそのようにいえるだろう。この矛盾は、地域を限定せずに孤立や拡大を表現していることから来ている。「ある地域では」という言葉をそれぞれの段落に入れば、矛盾は解消する。

最後の5行については論理性の欠如が集約的に示されている。それまでの内容とつながらないかたちで「階級なき社会は実現不可能に思われる」という文が現われている。また「実現不可能」の原因の問題とはつながらない結果論が次の文の内容となっている。「欺瞞性」については、共産主義が、その実現不可能なことを認識しながら建前上実現をめざしていることが事実であれば論理的に問題はないが、その前の文章で「私には」を入れることによって、自分の問題と自分以外の問題を混同する内容になっている。

以上みてきたような論理性の欠如は、この学生の卒論に限ったことではなく、この学生の卒論はあくまでも一つの例にすぎない。教師にとって卒論の審査の負担が膨大なものになる場合があるのは、非論理的で意味がよくわからない文章を、年度によっては原稿用紙にして500枚以上、暗号解読作業のように、仕事として最後まで読まなければいけないことにある。

ただし、この卒論にみられるような非論理性は、卒論だけに限定された問題ではない。なぜなら、この卒論ほどではないにしても類似の問題を、大学の研究者が一般向けに書いた書物や、大学入試センター試験の国語現代文の中にも発見することができるからである。そしてそれらの文章は、平成期に入ってから授業で学生が論理的な力をつけるためのまたとない反面教材となっている。

④フランス映画関係卒論

次の論文はフランスの映画女優、カトリーヌ・ド（ゥ）ヌーブ（以下「カトリーヌ・ドヌーブ」と記す）について書かれた卒論の一部である。外大の場合、学生の研究領域の特化が難しいことや、学則に違反していないことや、さらには思想・信条・宗教・表現の自由の保障ためにテーマを学生の自由選択にまかせていることから、このようなテーマの卒論も提出されることになる。この論文も昭和62年度以前に筆者が審査を担当したものである。作家研究などと同じように自分の好きなテーマに十分なエネルギーを注ぎこんだ卒論の例のひとつである。

普遍的な美の形状といえ、一つの典型としてだれもが思い浮べるものは、古代ギリシャ、ローマ期、あるいはルネサンス期の彫像だろう。さらにはもう少し卑近なものを例にとるなら、精巧なアンティーク・ドールや陶器の人形などもあてはまるだろう。

こう考えていくと、ドヌーブに対する「フランス人形」という形容句も、なかなか彼女の本質に迫るものがあるようだ。ブニュエルのシュールレアリズムの世界を幻想的、神秘的に彩るには、観るものに有無を言わせぬ完璧な様式美を用いなければならない。そしてその様式美の具現者は、淡々とした一種無表情のオブラートを身にまといなければならない。下手に個性の強い、あるいは演技的表現力旺盛な女優を起用するならば、却って狂おしい異形の世界が作品の表面に現れ過ぎて、それはそれで別の迫力を生むだろうが、芸術作品としての成功度はどうなっていたかわからない、とも言えよう。

ドヌーブのルックスの点から演技の特質の点へと話に移ってきたが、彼女のファン、また評論家が、彼女の「演技力」について述べている文章を少しピック・アップしてみよう。「ドヌーブはもっぱら地で行って、演技

力なんてあまり無いのかも。」(大内順子)

— 中 略 —

以上、カトリーヌ・ドヌーブのルックス的な面と演技力の特徴、そしてその二つの相関について述べてきた。ともあれ「演技力がない」などと指摘されながら、それをも自身の美の様式の一つに昇華させ、自己表現の有効な手段にしてしまうという資質を具えているとは、彼女は何と「得」な女優なのだろう。いや、実はこの資質こそが、常日頃スクリーン上で「魔性を秘めた美女」を演じていると言われる彼女の、本当の意味での魔性なのかも知れない。

『終電車』の大成功で、また一つ輝かしい勲章を増やした感のあるドヌーブだが、まだ当分、彼女のフランスのみならぬ「ヨーロッパ映画界の女王」の地位は揺るがないのではないかと一ファンとして、今後の彼女の活躍にますます期待をはずませているのである。

最初に置かれている「普遍的な美の形状といえは、一つの典型としてだれもが思い浮べるものは、古代ギリシャ、ローマ期、あるいはルネサンス期の彫像だろう。」という文の内容の問題点は、普遍的な美について誰もがヨーロッパの彫像を思い浮べるとしている点である。この学生の場合、そのことからわかるように、美を客観的な真理かそれに近いものと認識していると思われる。しかし、何を美とし何を醜とするかは、時代や社会によって異なるという意味で主観的であり、だれもが共有できるような客観的真理ではない。だから、この学生の場合、ものごとの認識の一つの前提となっているのは、自分という一つの主観を普遍的に拡大する自他未分離の思考法である可能性がある。この自他未分離の問題は、卒論を見るかぎりこの学生だけに関する問題ではなく、より多くの学生に関係している。

このことが、科学や学問の立場からみて無視できない重要な問題であるのは、自他未分離の場合には、主観がそのまま客観であるのだから、それぞれの主観に基づく相互の議論や論争や批判をとおして試行錯誤的に客観的真理に近付いていくという、科学や学問の方法が成立しないことである。逆にいえば、自分たちがそれぞれ主観というものに閉ざされていて客観的な真理という基準からみれば、無知無能の状態にいるという自覚や無意識の心理こそが、科学や学問を生み出していく原動力であるということであろう。この学生の卒論は、そのような心理とは逆の心理を示しているものとして代表的な例である。この学生を代表としてほとんどの学生達が卒論において示している自他未分離の思考法の原因は、学生達がこれまで受けてきた教育の中にあるとともにより根源的には、日本の社会の人間関係そのものにある可能性がある。すなわち日本人の人間関係が、自他の違いを明確に自覚するような人間関係ではないという可能性である。

続いて次のように書かれている。

「さらにはもう少し卑近なものを例にとるなら、精巧なアンティーク・ドールや陶器の人形などもあてはまるだろう。」

この文の問題点は、「卑近な」という言葉にある。西洋美術の中の彫像と比較して、アンティーク・ドールや陶器の人形を「身近な」と表現することは科学的にみて問題がないが、「卑近な」と表現することは、自分の個人的価値観を表現することに他ならず、客観的真理でないばかりではなく、場合によってはそれは社会的差別観を示すことになる。しかし、その価値観が常識的で多数の人間が共有しているものであるほど、個人的価値観や社会的差別観とは認識されず客観的真理としてそのまま科学や学問の世界に入ってくることになる。

この学生が、このような価値観をどこで身につけたかという原因につい

ては不明である。しかし、生まれ育った社会の中に、芸術や文学というものについてのランクづけがある可能性があり、また、教育の中でそのような価値観が伝えられた可能性がある。社会的にそういう価値観があることについて、科学や学問の立場からその是非については何もいえないが、科学や学問の世界の中ではそのような価値観を示すことはできないだろう。たとえば、高校の美術の教科書に出てくるような絵画よりも漫画やアニメが劣っているとする事や、純文学よりも大衆文学が低く位置づけられることや、美しい言葉と汚い言葉を区別することは、論証が不可能であることを、論証可能な客観的真理のようにとらえているという意味で、科学や学問の世界においてはルール違反となる。そのように、科学や学問の立場から見た場合、学術文献をコピーしたのではないこの学生のような自由な卒論は、研究者に日本の社会の現実のある側面を示してくれるものでもある。

「こう考えていくと、ドヌーブに対する「フランス人形」という形容句も、なかなか彼女の本質に迫るものがあるようだ。」という文の最初の問題点は、フランス人形に括弧がついているが注がついていないため、括弧がついている理由を推測はできても明確にはできないことである。この点については先にも触れた。

「本質」という言葉についても問題がある。「本質」という言葉を使ったときに、それが「本質」であるという論証が困難か不可能であることが多いからである。とりわけ人間について言う場合には、人間の心や性格や特徴などの複雑なものを、単純な本質に還元してしまう可能性がある。その意味で、科学の立場からは「本質」という言葉の使用には注意する必要がある。

「なかなか」と「だ」については、口語の使用と感情的強調という点で問題がある。とくに「だ」の使用は、この学生だけではなくより多くの学生に共通する問題である。口語の場合、その書き手や読み手のなんらかの

感情や偏見や差別観につながる可能性が強いという仮説から、できるだけ使用を避けるべきであるといえる。また、すでに触れた言葉の抽象度の違いが非論理性を生むということも、具体的な現実を表すことが多い口語の使用を避けるべき別の理由となる。

次の文に移る。「ブニュエルのシュールレアリズムの世界を幻想的、神秘的に彩るには、観るものに有無を言わせぬ完璧な様式美を用いなければならない。」という文である。最初の問題は、「幻想的」と「神秘的」という言葉にある。何を幻想的なもの神秘的なものを受けとめるかということとは、人によって違っているという意味で主観的である。たとえ同じものを幻想的なものや神秘的なものとして受けとめたとしても、受けとめた心理的な内容が同一かどうかについて証明できないという意味で、より根源的に主観的である。その意味で、あらゆる科学や学問が客観的真理の探求を目的とするのであれば、科学や学問においてこれらの言葉を用いることはできない。この学生の場合、それらの言葉に「彩る」という比喻をつなげることによって、文の意味をさらにあいまいにしているという問題もある。このような文をこの学生が書いている一つの原因は、文学作品そのもののや、エッセイや、文学芸術評論と学術論文との区別がついていないことにある。おそらくは、主観的表現が出てくる心理的可能性の度合いからみると、芸術や文学についての客観的、すなわち科学的卒論を書くことは、社会科学系の卒論を書くよりも難しいだろう。

その文章以外で、上の述べたような意味で主観的な言葉や語句をとりあげると次のようになる。「淡々とした」、「一種無表情の」、「オブラート」、「身にまとって」、「下手に」、「個性の強い」、「演技力」、「表現力」、「旺盛な」、「狂おしい」、「異形の」、「別の迫力」、「昇華させ」、「常日頃」、「魔性」、「大成功」、「輝かしい」、「勲章」、「増やした感のある」、「まだ当分」、「地位はゆるがない」、「活躍」、である。これらの単語や語句を削除するならばこの論文の文章量は減少する。要するに、客観的な真理を追求する科

学や学問としての内容は実質的にはより少なくなるということである。試しに科学や学問の立場からこの文章を書き替えると次のようになる。

「カトリーヌ・ドヌーブには、演技力（ただし、その明確な定義は別に
する必要がある）が無い可能性があるが、多くの人に支持されている（た
だし、そのデータを示す必要がある。）支持されている原因の一つは彼女
の美しさにあると思われるが（これについても、アンケート調査などで裏
付ける必要がある）、その美しさは表情の無変化を特徴としている。（この
ことについては科学的測定が可能であろう。）そして、その表情の無変化
は、彼女の内面を未知とすることで人々の想像力を刺激しかえって人々の
支持を増加させている可能性がある。」

行数のみ単純に計算すると、もとの卒論の文章が36行であるのに対し
て、この文章は括弧の部分を除くと8行であり、4分の1以下に縮小して
いる。このことは、主観的な言葉や用語を用いた文章、すなわち感想文や
エッセイを書くことは、科学や学問の文章を書くことより、数量的にみれ
ば容易であることを示している。もちろんそれは、主観的な言葉や用語を
用いた文章を書くことが精神的に容易であるということではない。

論文の最後にあたる「今後の」から始まる文は、この卒論の意図を明確
に示している文である。自分が好きな映画俳優について卒論を書いている
のだから、この結論は論理的には不自然ではないが、学術論文としての卒
論であることを否定する証拠となる。そしてそれは、映画についての研究
だけではなく、芸術や文学に関する研究一般において、好きな作品や作家
について学術論文を書く場合に何に注意する必要があるかということをも
明確に示しているという意味で貴重であるといえよう。

⑤外国人労働者関係卒論

最後に、これまでの4本の卒論とは違って、平成期に入ってから卒論を例としてみる。最初に触れたように、平成期に入ってから卒論の指導を本格的に開始した結果、次の卒論のようなケースは全くなくなっている。次の卒論は、偶然その指導と無関係に書かれたものであり、これまで触れてきたような卒論の問題点が過去のものではない、すなわち卒論を書くうえでの基礎となっている教育そのものは変化していない、ということを示している一つの証拠になる可能性があると思われる。

序 章

「謎の国・フランス」。日本人にとって、きらびやかなファッション、料理、シャンソン、観光などで有名な「おフランス」はよく知られているが、つい最近まで社会党政権下にあった、その国の実態は意外と知られていない。失業、犯罪の増加による社会不安に苦しみながらも、統一ヨーロッパでかつてのナポレオン帝国のような指導者を夢見る国家。子供から大人まで、社会や政府のあり方に疑問や不満があればそれを露にし、ストライキを起こす、熱い国。シラク政権下で再開された核実験に我々は愕然としたが、実は我々が知らなかっただけの、フランスの過激な表れだったのかも知れない。

わが国でもそうだが、ある国のイメージはその中の過半数（マジョリティー）によって作り上げられる。しかし、その国の構成員であっても数が少なく、社会的立場の弱い人々（マイノリティー）は必ず存在する。そして、その様な社会的弱者に対する国や国民の態度や処遇によって、普段はみられない意外な面や本音が見えてくる。ヨーロッパの諸国の中でも最も多くの移民を抱える国としてのフランスについても、「移民」なるマイノリティーについて考慮すれば今までになかったフランス像が浮かびあがる

のではないかと考え、取り上げることにした。

——後 略——

第4章 将来への課題：共生に向けて

——前半部は省略——

しかし、論じているだけでは何も変わらない。フランス語、邦語、さまざまな資料を比較研究して痛切に感じるのは、学者特有の観念主義である。歴史、統計、法律、専門概念関係をよく把握し、正確に分析しているが、それを用いていかに行動すべきかが伝わらない。政府の役割についても似たようなことが言える。移民の置かれた貧しい状況、システムに基づく犯罪を国政調査や警察の記録に基づいてある程度把握しておきながら、「移民を特別扱いするとかえって差別を招く」と結局何の手も打たないのではそれは単に怠惰の言い訳にしかない。差別を招く対策を避けるのではなく、差別そのものをなくすよう、今まで以上の努力を払うべきなのである。

そのためにはフランス社会の構成員との連携が不可欠である。「共生」を唱える政府の数々の政策の意味を国民が理解しなければ意味がない。

——後 略——

終 章

「あなたの方のもとに外国人として住む外国人居留者は、あなた方の土地に生まれたもののようにされるべきである。あなたはこれを自分自身のように愛さねばならない。」

— 聖 書 —

現代フランスで行なわれた移民政策はかなりの期間、試行錯誤を繰り返

し、1970-80年代に入ってようやく本格的な政治として確立し始めた。しかし、移民の生活状況、人権保障などが決定的に改善されぬまま今日に至っている。

——中 略——

今存在する救済策を十分に活用し、将来、より良い移民政策を実現させるためにも、移民や他のマイノリティーを含むフランス社会の構成員一人一人が互いの隣人としての存在を認め、共に生きていく「共生」の意識を育み、現状の問題を問題とはっきり認め、改善するために積極的な行動を起こさなければいけない。

——中 略——

フランスに限らず世界中どこでも存在する社会的弱者（外国人、障害者、貧しい人々）の状況について、私たちはどれほど知ろうとしているだろうか。

——中 略——

今回の研究を通して、今まで気付かずに過ごしがちだった外国人を含む社会的弱者、自分とともに社会を構成している人々との「共生」を、社会人として意識、理解しながら生きていきたいと思っている。

最初の文からみても。「謎の国・フランス」。この文のような体言止の文は、この序章のほかの場所でも用いられている。また、これまで他の卒論においても用いられており、社会人の卒論の中にも見いだすことができる。それらのことから考える限り、体言止の文章の論文における使用についての学生の理解が必ずしも十分ではないように思われる。体言止の文章

は、全体の正確な意味を文の外におき、読み手それぞれの解釈を許すという意味で科学的論文に用いることはできない。まして、それが言外の余韻のために用いられているのであれば、科学的論文とエッセイの区別がなされていないことになる。他の研究者への明確な伝達を目的とする学術論文においては、人によって受けとめ方が違うという意味で明確ではない、余韻を残す表現方法は原則として使用できないということを身に付けていることは、文学的表現の使用や朗読に適した日本語の文章表現を身に付けていること以上に社会生活上は重要なことであると考えられる。

次に、すでにふれたような個別的問題を省略して、文章全体に関する問題を見てみよう。

「日本人にとって、きらびやかなファッション、料理、シャンソン、観光などで有名な「おフランス」はよく知られているが、つい最近まで社会党政権下にあった、その国の実態は意外と知られていない。失業、犯罪の増加による社会不安に苦しみながらも、統一ヨーロッパでかつてのナポレオン帝国のような指導者を夢見る国家。子供から大人まで、社会や政府のあり方に疑問や不満があればそれを露にし、ストライキを起こす、熱い国。シラク政権下で再開された核実験に我々は愕然としたが、実は我々が知らなかっただけの、フランスの過激な表れだったのかも知れない。」

この文章で現実や事実のように書かれていること一つひとつを批判的に検討すると、根拠が疑わしく科学的認識ではないことが分かる。にもかかわらずここに書かれていることは書き手にとっても読み手にとっても当然の現実や事実として受けとめられる可能性がある。なぜなら、ここでは、常識的知識に属する可能性があることが、理解しやすいと考えられる文章で書かれているからである。社会科学系の卒論だけではなく、社会科学一般についても言え、さらには人間や社会に関する学問一般にも妥当する可能

性があることは、科学的根拠を持たない常識的知識、ある場合には、社会的幻想が自覚されないまま科学や学問に入りこんでくるということである。おそらくそれは、人間や社会についての科学や学問が、厳密に科学的であることが困難であることを一般的に意味しているだろう。その意味では、この学生がこのような文章を書くことは無理がないとはいえる。しかし、他方でそのような常識的知識が入る分だけ、科学であることを失うのも事実である。したがって社会科学が科学であることを目指すとすれば、社会科学に関係する人間は、自分の中の無意識の社会的常識や価値観を対象化することで、それらが無意識のうちに科学の内容に入ることを防ぐ必要があることになる。すなわち社会科学に関係する人間は、自分の外の社会を対象化することが必要であるだけでなく、自分の内の社会を徹底して対象化することが必要である。この学生の卒論は、書物をまとめただけの論文よりもより明確にそのような基本的問題を示している。

次の段落の最初の三つの文についてみてみよう。列举すると次のようになる。

- ・わが国でもそうだが、ある国のイメージはその中の過半数（マジョリティー）によって作り上げられる。
- ・しかし、その国の構成員であっても数が少なく、社会的立場の弱い人々（マイノリティー）は必ず存在する。
- ・そして、その様な社会的弱者に対する国や国民の態度や処遇によって、普段はみられない意外な面や本音が見えてくる。

これら三つの文の内容を前提として、その次の文で卒論のテーマ選択の理由または目的について次のように述べている。

- ・ヨーロッパの諸国の中でも最も多くの移民を抱える国としてのフランス

についても、「移民」なるマイノリティについて考慮すれば今までになかったフランス像が浮かびあがるのではないかと考え、取り上げることにした。

これらの文の関係を考えてみると、最後の文の内容を論証するために前の三つの文があることになる。ところが、この論証には問題がある。なぜなら、前の三つの文の内容は前提とできる公理にはならないからである。一つひとつの文で無条件に断定しているが、一つひとつの文の内容そのものが、別の論文によって論証されるべき仮説にすぎない。にもかかわらずこの学生は明快に断定している。しかも文章の内容からみて、先にふれたような常識的知識がはいりこんだ結果であるともいえない。常識的知識の場合には、社会的にそれが正しいと思込まされているという原因の説明が成り立つが、これらの文の内容は常識的知識ではないのだから、明快な断定の原因は別に探す必要がある。根拠のない断定は、それが明快であるほど、科学そのものを否定するといえるから、この学生のような断定と論証の仕方の原因を明らかにしその原因を除去するか、論文には影響を及ぼさないようにすることが科学教育という面からは必要であるということになる。この学生についての情報がほとんどないため正確な分析はできないが、卒論の内容からいうと、この学生の感情的な思い込みの強さが原因ではないかと思われる。実際、断定度の強さの原因については、この学生だけではなく他にも同じような例がいくつかあることから、感情的な思い込みが科学や学問にとっても根拠の無い断定を生むひとつの原因であるという仮説を立てることが可能であろう。その仮説が正しいとすればこの卒論が示唆していることは、学生が持っている感情的思い込みをどのように修正またはコントロールさせ、科学的精神を身につけさせるかという課題である。感情的な思い込みの強さは、その原因として感情の激しさを伴っていることが多いという仮説を立てることができるが、そうであるとする

と、原因は学生の性格に密接に関係することになるため、課題の達成は容易ではないことになる。

この学生の感情的な思い込みの強さは、次の第4章からの抜粋の部分では、別の問題に関係してよりはっきりと示されている。この部分では次のような語句が使われている。「いかに行動すべきか」、「怠惰の言い訳にしかない」、「努力を払うべきなのである」、「連携が不可欠である」、「意味がない」、という語句である。これらはすべて筆者であるこの学生の根本的価値観を暗示している。その価値観というのは、「外国人労働者への差別をなくすべきである」という価値観である。現実の社会の中でみた場合には、この価値観は非難されるものではない。それは、思想・信条・信仰の自由という憲法に保障された基本的人権の一部だからである。しかし、たとえそうであっても、社会科学的にみるとそれは価値中立性原則に違反している。社会科学的にみた場合、自分の価値観を語ることはまったく意味がないだけでなく、ルール違反となる。価値観を語ることに关するエネルギーはすべて、差別の原因を現実 に即して明らかにし、また、差別が結果的にその社会や人間にもたらすものを現実 に即してあきらかにすることに向けられるべきである。それはこの学生に、単なる言葉だけの社会的アジェンションではなく、現実 に差別をなくす方法を教える可能性がある。それこそが大学がこの学生に与える知性であろう。それは、激しい感情に支えられた価値観のエネルギーをコントロールする知性を、この学生に与えることである。

価値観の問題については、卒論の口頭試問のときにその学生に伝えたが、そういうことは初めて知ったようである。その学生だけではなく、これまでの卒論指導や口頭試問の経験では、学生達のほとんどはその問題をまったく知らなかった。そのことから、人間や社会についての科学や学問においてだけではなく自然科学においても最も基礎的な原則を、ほとんどの学生は大学卒業の時点においても知らないことが一般的であるという仮

説を立てることができる。欧米の社会科学の歴史や自然科学の歴史における価値中立性をめぐる論争の歴史や、その科学的重要性から考えると、大学卒業の時点において価値中立性の問題をまったく知らないということは、科学教育がもっとも重要な基礎において失敗していることを意味している可能性があるといえよう。

この卒論の終章の部分に移る。終章の最初に聖書から引用した文章がある。このように、最初に本文から独立して、引用した文や文章を置くやり方は、この学生だけではなく他の学生も行っている。おそらくは市販されている書物などの例にならったのであろう。

しかし、この書き方は学術論文さらには論文一般において適切ではない書き方である。なぜなら、論文が論証の文章であるとすれば、独立しておかれた文または文章は本文と明確に関係づけられていない、すなわち明確な論理を持っていないからである。もちろん、独立して置かれていてもそのあとに本文との関係を説明している場合は一般の引用と同じように問題はない。本文の内容の象徴として、それを読む人によってはなんとなく関係を感じるようなかたちで孤立しておかれている場合は、すでにふれた比喩の問題と同じようにさまざまな解釈を生む可能性があるという意味で、できるだけ誤解の無い明快な論証のための論文とは対立する。まず、そのことがこの終章の問題点としてあげられる。

次の問題は先の第4章と同じ問題である。「改善されぬまま」、「よりよい移民政策を実現させるためにも」、「積極的な行動を起さなければいけない」、という語句によって、この学生の価値観が第4章より明確に示されている。第4章のように本論の途中において部分的に価値観が表れているよりも、結論において、しかもより明確に価値観が表れている方が卒論としては重大な欠点となる。なぜなら結論において価値観が示されていることは、その卒論が学術論文を目指したものではなく政治的・社会的評論やアジェンダが目的であることの証明となるからである。政治的・社会

的評論やアジテーションを科学や学問の立場から評価することは不可能であり、内容的に評価するとすればそれは憲法において保障された個人の自由の侵害になる。大学の面接において思想・信条・信仰についての質問と評価ができないのと同じことが卒論の内容についてもいえる。従って、このような卒論は審査不可能ということになる。

さらにこの学生の場合は、最後から2番目の文が示しているように、疑問文を結論に含んでいる。さらには、終章の最後の部分、すなわち結論の最後の部分が、個人的または私的感想で終わっている。主観的な感想の論証をしても科学や学問にはならない。

以上のことからわかるように、この学生は、科学や学問というものが何なのか、卒論や論文をどのように書けばいいのかということに関する最も基礎的で原則的な問題、すなわち価値中立性原則を理解していない。しかしその無理解の責任はこの学生にあるのではない。実際、この学生はこれまでの平均的な学生よりも多くのフランス語文献を読み熱心に卒論にとりくんでいる。また、授業でこの問題を説明しなければ、昭和62年度以前の卒論が証明しているようにほとんどの学生が同じ誤りをするのが現実である。この学生の場合は偶然、そのような卒論指導の授業を履修しなかっただけである。この学生の卒論が示していることは、どれほどの文献を読み熱心に努力しても、科学や学問の基礎的な基準や目的を理解していなければすべて無駄になるという事実である。そしてその結果の責任はこれまでの教育にあるといえよう。

(2) 卒業論文からみた日本の教育の問題点

以上、卒論を個別的に分析してきた。それらの分析をもとにして日本の教育が持っている問題点についていくつかの仮説を立ててみることにする。仮説は、科学や学問の立場からみてより初歩的と思えるものから順に述べる。

①主観的なことと客観的なことの混同

卒論などの学術論文の場合、客観的な真理の探究が目的であるのだから、可能な限り主観的な認識のありかたや言語表現を排除しなければならないことになる。しかし、学生達の卒論をみると、その基本的なことがほとんどできていない。そのため、どのような文章を書くべきかわからず、結果的に感想文や政治・社会評論を書くことになり、努力が無に帰すことになる。大学卒業の段階での卒論であることからいうと、高校までの教育においてのみならず、大学教育の中でも学生達はその問題を学んでいない。科学や学問の知識として学んでいないだけでなく、より根本的なものごとの考え方において、主観的認識と客観的認識の違いについて自覚していないように思われる。この場合、より根本的なものごとの考え方においてというのは、科学や学問の世界を離れた学生達の日常の思考方法においても、ということである。そのため、主客未分化の考えかたはほとんど学生達の自然な考え方となっているから、他人から指摘されて初めて学生達は自分のものごとの捉え方や言語表現が主観的なものであり、ある場合には自分の価値観を含んでいるものであり、ある場合には差別的みかたを示しているものであることに気が付く。

主観的な認識のありかたや言語表現を排除するということは、主観的な世界を否定するということではない。それは科学や学問の世界の独自性や厳密さを増加させるとともに、主観的な世界をより自由で個性的なものとして客観的な世界から解放する可能性がある。たとえば卒論で学生が書いているように美というものを単一の基準で測定するのではなく、個人によって違って当然のものであり、どのような美が優れているとも劣っているともいえないとする科学や学問の立場からの位置づけは、美に関係する世界のさまざまなものを等しい価値を持つものとして扱うことになる。そしてそのことは、個人それぞれが持つさまざまな美的感覚を正当なものと認めることによって、芸術や文学の多様性や創造性を生み出す可能性がある

る。逆にいえば、美に関することが客観的に測定可能であると暗黙に前提した教育は、それぞれの生徒や学生の個性や創造性を画一化し抑圧している可能性があるということになる。その意味で科学や学問に関係する教育上の問題点は、芸術や文学に関係する問題点と密接な関係にあるといえよう。

②論文を書くための基礎訓練の欠落

この問題に関して最初に触れておくべきことは、ほとんどすべての学生において、一つひとつの単語の使用方法が厳密さを書いているということである。個別分析でも表れているように、学生達は言葉や用語の定義を明確にして文を作るということを知らない。論文の場合、とくに学術論文の場合、一つひとつの言葉というのは文の基礎単位であり、定義が明確でなければ文そのものが論理的に明確でなくなり、さらには文を構成要素とする文章が単語数の分だけ累乗されて非論理的となる。であるから、一つひとつの言葉の定義が文の出発点として重要であるが、ほとんどすべての学生は最初に定義すべきであることを知らないし、定義という言葉そのものが自覚の対象に入っていないと思われる。これは単なる論文の基礎訓練の欠如という範囲を越えて、科学や学問の基礎訓練の欠如を意味しているという点でも重要である。

分析した卒論の中には少ないが、これまでの卒論の審査において多くみられる問題の一つは主語の欠落である。主語が欠落していても潜在的関係から論理的意味が明らかな場合もあるが、しかし明示されていないためにさまざまな解釈の可能性を残しており、そのため前の文との関係が不安定になる場合も多い。したがって、主語の明確な設定というのは、明示的な論理性が重要である論文において不可欠と考えられる。しかし、学生達はこのことについても、国語教育における十分なトレーニングを受けていないと思われる。

次に、文の主語の欠落と重なったかたちで出ることが多い問題は、長文の使用である。長文自体の是非については絶対的基準は立てられないと思われるが、長文になることが、読み手にとって論理的追跡を困難にさせ、誤解や解釈の差を生じさせる可能性が強いとすれば、科学や学問の論文としては長文は適当ではなくなる。その場合には、長文を用いることは個人的な趣味の問題となり、できる限り多くの他者との間の誤解のない相互批判や相互情報伝達を目的とする科学や学問の問題とはならないだろう。実際、長文で書いている学生の場合には、書いている本人自身が文の途中で意味的關係を見失っていることが多いことからいって、できるかぎり短文で書くトレーニングが必要と思われる。

短文で構成されている場合にも、文を関係づける接続詞の使いかたが問題となる。学生達の論文の場合には個別論文の中にもみられるように、接続詞を使っているが実際にはその接続の意味が成り立たないか、接続詞を使わなくてもいい個所に飾り的になげなく置いていると思われるケースがある。また、「ところで」とか、「さて」という語句を使用することで、別の接続詞によって正確につなげるべき部分を単純に切り替えているケースがある。これは論理的な意味関係を正確に把握していない部分に多い。論理的意味が決定的役割を果たす論文においては「ところで」とか「さて」という語句は原則的に使用すべきではないということも学生達が論文を書くために学ぶべきことである。

文の間関係についてだけではなく、個別分析でも指摘したように文章の間のつながりかたや、章や節のつなげ方についても同じことがいえる。新しい章や節に入ったときに、それまでの章や節との関係が読み手にとってあきらかになるように書くことが、論文の場合は不可欠である。なぜなら、論理とはものごとの関係であるから、前の章や節と関係が切れていれば、論理的な文章構成ではなくなり、論文としてのレベルは下がるからである。前の章や節か、新しい章や節の最初に関係を説明する文を一つ入

れば論理的レベルが上がるにもかかわらずそれをしていないケースはほとんどの学生の卒論にいえることである。学生達の卒論だけではなく、研究者の論文や一般書にも同じケースがしばしばみつけだせる。

接続詞とともに学生の卒論で論理的意味をわかりにくくさせているのは、指示代名詞や指示形容詞の使用である。指し示す対象がすぐ前にあり、しかも特定の名詞を指すような場合は問題ないが、前の文の意味内容を指すときなどはほとんどの学生は論理的に失敗している。そのため、卒論の指導においては、文章が重くなるとか、同じ単語を繰り返し用いないほうがいいのか、美文にならないとか、読むときの流れが悪いとか、朗読に適さないとか、ということすべて無視して指示代名詞や指示形容詞を用いず、名詞や語句や文をそのまま言い換えずに使用することを薦めている。なぜなら、論文の場合、とりわけ学術論文の場合、文章の論理的意味が他人に誤解なく理解されるということが目的である以上、目的に矛盾することはすべて排除されるべきであるからである。

より問題を大きくとらえて論文全体という面でみると、まず序論に関しては、序論で論文の目的を書く必要があるということも学生達は学んでいない。結論に関しては、個別分析でもみたように、「結論」の意味を理解していない学生がいることがある。すなわち結論を疑問文で終わることはできないということを理解していない。

本論で論証していないことを結論の中で書くことができないということも論文の全体構成において重要である。論文というものが論証ということの内容とする文章である以上、論証されていないことが結論に含まれることは重大なルール違反となるからである。序論の問題提起と結論の部分が対応していないということも見られるがこれも論文としては重大なミスになるだろう。

個別分析の部分で指摘したような言葉の抽象度のレベルの違いということに類似の問題も論文の全体構成において生じる。たとえば、章と節を

分けて構成する場合に、抽象度の違うものを併置するような場合である。例をあげると、第1章・動物として、第1節・脊椎動物、第2節・犬とするような例である。抽象度のレベルの問題を論文全体について処理するには論文全体の論理構成を学生が明確にとらえていることが必要であるが、これも半数近くの学生はできない。章や節の構成を少しだけかえれば論文の全体構成がより明確になり、学生本人の中でもさらに問題が整理されあらたな発見にもつながりうる手前でとどまっているようなケースがある。抽象度の違うものをつなげるもう一つの誤りは、入学試験の小論文の解答でみられるパターンのようなものである。たとえば典型的には、まず自分の個人的経験を示して、そこから一般的な結論に至るという構成である。これは論理的には、例証によってより一般的命題を証明するやりかたであるが、最も科学的ではないやり方の一つである。なぜなら、一つの例証は別の一つの反証で否定可能であり、このやりかたで論証できるのであれば、統計学や統計データは必要なくなるだろう。

全体構成については、これまでの教育の中で学習したと思われる「起承転結」という文章構成パラダイムが問題である。このパターンに縛られて動きがとれなくなっている学生が実際これまで何人か生じた。論文の場合には、転の部分を挿入する必然性を論証することが不可能である。論文の場合に同じようなパラダイムにあらわすとすれば、「起承結」であり、換言すれば、序論—論証—結論、または、問題提起—論証—解答となる。起承転結は、詩や小説や演劇などにおいては重要なパラダイムである可能性があるが、それらと学問・科学の文章とは、文章そのものの目的が異なるのだから論文においては起承転結はむしろマイナスである。その意味で、国語教育において「起承転結」だけを教えているとすれば、そのことは、科学教育を大きく阻害している可能性があるといえる。

③批判力の欠如

個別卒論分析においても指摘したように、学生達が卒論において他人の書いた文章を引用するとき、十分に指導せず自由に卒論を書かせた場合にはほとんどの場合、他人の文章にどれだけ問題点が含まれていても、無批判にそのまま自分の考えとして利用する。それは言い換えれば、他人の考えをある書物からそのまま切り取って自分の卒論に貼り付けることでありデカルト精神とは対極的な姿勢がそこにはある。筆者の経験では、授業でレポート課題を出した場合にはほとんどすべてがそのような内容のレポートとなる。しかし、これはある意味では無理の無いことである。受験勉強というものが、基本的に、教科書や参考書に書かれたことをそのまま憶えることであるとすれば、批判的に検討しながら読む機会はほとんどなかったと考えられるからである。また、大学に入ってから、授業で教師が伝えることや、教科書の内容を憶えることが中心であれば、受験勉強とそれほど変わらないといえるだろう。その結果、学問や科学の独創性の出発点である他人の考えを徹底して批判的に受けとめるという精神、すなわちデカルト精神とはまったく無縁な精神だけを学生達は持つことになる。

平成3年と平成10年の大学審議会の答申においては今後の高等教育の課題として創造性や独創性の開発が求められている。創造性や独創性というものは、それまでの他人の考えと違ったものであるのだから、他人の考えを無批判に自分の考えとして利用するやりかたからは創造性や独創性が生まれないのは明らかであろう。だとすれば、創造性や独創性の開発を目的とする場合には、他人の考えを批判的にとらえ問題点や疑問点や欠けている点をみつけたすことが何よりも不可欠の前提条件となる。なぜなら、他人の考えの中に発見した問題点や疑問点や欠けている点というのはそのまま、自分なりの創造性や独創性の出発点となるからである。もちろん、問題点ととらえた自分の方が間違っている場合もあるが、逆に他人の方がまちがっており、そこからあらたな発見が生まれる可能性がある。その意味

で創造性や独創性開発・育成の可能性は、他人の考えを無批判に自分の考えとしていたときよりも大きくなるはずである。

卒論作成のための準備として、授業では、フランスの文化や社会について書かれた文章を教材に選んで、学生達自身がそれらを批判する訓練をこれまで10年近くしてきている。その経験からいうと、最初はやりかたにとまどうか、まったく批判出来なかった学生が、何回かするうちに専門研究者の書いた文章の中にあるいくつかの問題点や疑問点を見つけ出すようになる。みつけだすことが専門的知識の量に依存しているような場合には、より困難になるが、一般向けに書かれた書物の場合には見つけ出すことは学生達にとって容易である。学生達のそれらの指摘は、そのまま専門研究者の仕事上の責任追及を意味している場合が多い。ある場合には、それらの指摘は、学生が大学の専門研究者よりも批判力やその基礎となる論理力、すなわちデカルト精神を持っていることの証明となる。

それらのことからはっきりとわかることは、学生達が批判力を持っていないのではなく、日本の教育の中においてその力を抑圧されてきているか、または、十分に開発されてきていないということである。

④論証力育成の不十分さ

これまで触れた三つの問題も論証力の問題に密接につながっていると思われるが、ここでは最も基本的な論証力についてのみ触れる。

科学や学問の論文というものは、他人を納得させることによって客観性を確保するための手段として、論証を基本的に不可欠のものとしていると考えられる。最も簡単な関係を考えるなら、論証の度合いと科学や学問の論文のレベルの度合いとは、正の相関関係にあるといえよう。したがって論証の度合いがゼロの場合には、科学や学問の度合いはゼロになる。感想文というのはそもそも主観的な感覚や感情に基づいているものであるから、他人を納得させる論証の度合いはゼロか、または相対的に低い度合い

にとどまることになる。学生達の卒論をみると、そのような、論証が全くない感想文を書くことはできるが、科学的な論証をともなった論文を書くことができない。そのことを示しているのが①の卒論であった。

問題をより根源的に考えると、そもそも、科学や学問の世界や卒論において論証が不可欠であるということ自体を学んでいない。そのことは、大学入学の時点でもいえるが、卒論を書く段階においてもいえることから、大学教育によっても学んでいないことになる。だからこそ、感想文やエッセイを卒論として提出する学生が多くなる。論証力というのは、大学審議会が求めている、自ら考え判断する能力そのものと思われる。なぜなら、考えて判断（結論）にいたるということは、判断の理由や原因を考えて自分自身に論証することに他ならないといえるからである。その意味では、大学においては、論証を含まない知識を憶えさせるのではなく、論証の実践的トレーニングや、論証の方法を憶えさせる教育が必要であると考えられる。

論証の実践的トレーニングとしてまず必要なことは、自分の判断の根拠や理由を必ず示すというパターンを身に付けさせることではないかと思われる。別の言い方をすると、すでに分析した卒論のような根拠を示さない断定や思考を否定することである。そのための方法として、ゼミにおいてある学生が自分の意見を述べたときに、その理由についてその学生に対して連続的に徹底して聞きつづけるという方法がある。また、誰かが考えを述べた場合にも、必ず理由や原因を聞くということを徹底するという方法もある。これまでの卒論指導の経験では、その方法だけでも学生は変化し論証力のレベルを上げるように思われる。

最初に触れたような、主観的なものと客観的なものの区別についても、自分の考えの根拠や理由を問うという姿勢を持つならば、主観的なものは誰もが納得できる根拠を示すことができないということに気がつくことで、ふたつのものを分けることが自然と可能になると思われる。主観的な

ものを排除することができれば、それだけで科学的論証力のレベルは上昇するだろう。

⑤科学的精神の欠如

主客未分離の問題をはじめとして、根拠が全く無いか、不十分なことを事実であるかのように断定する姿勢にしても、事実および現実認識の根拠を明確に示さない姿勢にしても、論証が不可能か困難な巨大仮説を、事実または現実であるかのように書く姿勢にしても、それらはすべて、学生の中に科学的精神が十分に形成されていないことを示していると考えられる。なぜなら、科学や学問の目的が客観的真理の追究である以上、それが客観的真理かどうかは、すべて誰でも納得しうる論証に依存しているにもかかわらず、それらの姿勢は根拠を欠いているか、不十分であるという点で共通しているからである。科学的精神が十分に形成されている場合には、科学や学問の基本的原則である根拠に基づく論証を無視することはできなくなり、それらのとらえかたや表現ができなくなるから、学生達のような姿勢は、科学的精神形成の不十分さの証拠とみなして間違いないと思われる。

他人が書いていることについての受け止め方にも、同じ問題が関係している可能性が強いと思われる。なぜなら他人が書いていることを受け止めるための最初の条件として、他人が書いていることが本当に事実または現実であるか、という判定が必要であり、その判定に自分なりの結論を出すためには、他人が書いていることの根拠や証拠を確かめ、その根拠や証拠に基づく論証を批判的に検討することが不可欠であるからである。

学生達の卒論においてみられることは、自分自身の考えを述べる时候にも、根拠や証拠を示さないのと同じように、他人の考えについても根拠や証拠を確かめようとしないことであり、その二つの側面は対応している可能性が強い。ただ、権威主義的受け止めかたが強い場合には、二つの側面

が独立している場合も無いわけではない。しかし、根拠と論証というのが科学的精神において根本的で原則的なものであることを考えると、独立する可能性は少ないといえよう。

学生達のそのような姿勢が日本の教育によってなぜ生み出されるかという原因は複雑であると思われる。とくに数学や自然科学のように論証を不可欠のものとするゆえに学生の科学的精神を育成したはずの学問が、どのように教えられ、どのように学生達に受け止められてきたかということが、原因の分析を複雑にするだろう。しかし、一般的に問題をとらえるならば、それが事実や現実かどうかの根拠と論証にこだわることなく、事実や現実や真理として、論証の結果である知識だけを憶えるという行為が、根拠と論証を根本的原則とする科学的精神の否定であることだけは明確であるだろう。

その意味では、学生達の科学的精神の欠如は、知識記憶型の日本の教育に責任があるといえるだろう。学生達は、日本の教育の現状を卒論を通して忠実に報告しているにすぎないだろう。

結論：学生達の卒論の教育的役割—デカルト精神形成と真の国際人育成のために—

学生達は第2章でのべたような教育上の問題点を持ちながら卒論という学術論文にとりくむことになる。学生のほとんどにとっては400字詰め50枚、すなわち2万字の論文を書くのは初めての経験である。しかも、論文を書くための基礎訓練をほとんど受けてきていない。だから、毎年卒論を提出したあとにゼミで実施している卒論についての反省会で、卒論をまとめることがどれほど苦しかったか、という発言がでるのも無理がないといえる。ほとんどの学生は、大学受験勉強よりはるかに苦しかったという感想を述べる。同時に、苦しかったが、卒論を書いて初めて大学生らしい勉強ができて人生の記念になったという感想も多い。

卒論をまとめる中で、学生達はおそらく、これまでの教育において手に入れることができなかったものを、これまでの教育時間よりも少ない時間で一挙に身に付けなければ、卒論を書くことはできない。それは学生達にとって苦しい作業であると思われるが、しかし、その苦しみの中で、大学審議会答申の求める「自ら考え判断する能力」や、「課題探求能力」や、文化の面で国際的に貢献できる力を身につけるように思われる。

そのような力を身につけるために、本稿でふれたような卒論は、学生達にとって最適の教材であると思われる。なぜなら、本稿で触れたような、卒論の中に含まれている問題は、そのまま現在の学生達も共有していると思われるからである。現在の学生達も、大学教育を受ける過程で問題を自覚しなければ、同じような卒論を書く可能性が強いということからいうと、過去の卒論の内容は、現在の学生達にとっても自分の思考の内容そのものであるから、それらの卒論の批判的分析は、学生達にとってこれまでの日本の文化と教育によって形成されたありのままの自分自身の解剖、さらには外科手術を意味しているといえるだろう。

既提出卒論はそのように、学生達自身にとって重要な意味を持っているだけではなく、日本のこれまでの科学教育の問題点と今後の課題に興味がある人々にとっても、無視できない重要な意味を持っている可能性がある。なぜなら、教育というものが単に一方的に知識を教えられる受身的な人間を育成することに目的があるのではなく、自分で能動的に知識を創ることのできる人間を育成することにあるとすれば、学生達の卒論における失敗は、日本の科学教育の最終的な失敗の証明となるからである。最低で16年間の教育を受けていながら、科学的精神とは全く無縁の、根拠が明確でなく意味のわからない主観的感想文、中学生のレベルの文章しか書けないとすれば、教育の失敗は明確である。卒論の場合は書くという問題であるが、会話においてもそれほど違わないことは、ゼミでテーマを決めて議論をすると明らかになる。日本の教育全体の、一つの現実的結果の明ら

かな証拠を直視しながら日本の教育問題を考えるために、学生達の書いた卒論は貴重な意味を持っている。

さらに、学生達の書いた卒論は、学生や教育関係者以外の、日本で主たる教育を受けてきた人達一般にとっても貴重である可能性がある。なぜなら、学生達が文献を模写せずに自分の頭で考え自分の力で書いている卒論ほど、多くの日本人の常識的思考や慣習的思考を含んでいる可能性があるからである。それらの思考が現実や事実を正確にとらえるための科学的思考と対立しない場合には問題がないが、対立している場合で、かつその人が現実や事実を正確にとらえることを価値あるものとする場合には、それらの日本的思考を修正することが必要となる。だとすれば、本稿で触れた問題は単に学生にとっての問題ではなく、より広範囲の日本人の共有問題であることになる。本稿でとりあげた5本の卒論は、日本人という母集団の特徴を正確に示している標本集団である可能性があるだろう。

その意味では、学生達が借り物の知識に頼らず自分の思考力と表現力によって書いている、本稿で触れたような卒論は、欧米が生み出した科学や学問の方法と、日本人の中にある伝統的思考法との違いを明確に示しており、日本人全体にとっての科学教育課題を示している国民的科学教育教材であると位置づけることができるだろう。すなわちそれらの卒論を日本の近代史において位置づけるならば、いまだ成し遂げられていない課題、すなわち欧米の科学や学問の精神の日本における土着化という課題、いいかえれば日本人の精神の近代化という課題、または第二次世界大戦時の戦略や戦術に露呈された日本人の現実認識の甘さ、すなわち科学的認識の欠如の克服という課題（たとえば、戸部良一他著『失敗の本質—日本軍の組織論的研究』中公文庫に示されているような課題）、さらにいいかえればデカルト精神の血肉化（アンカルナシオン）という課題を実現するための反面教材として位置づけることができるだろう。それらはまた、日本における大学改革を実現するために不可欠の反面教材でもあるだろう。

さらには、大阪外国語大学のように国際人を形成することをひとつの課題としている大学にいて、本稿で触れたような問題点を自覚し、それらを修正していくことは、学生達の思考とその表現の論理性、さらには科学性のレベルをあげていくことを意味している。特に論理性のレベルをあげていくことは、国際人育成にとって重要な意味を持っていると考えられる。なぜならサルトルの基本的姿勢を引用するまでもなく、科学の歴史が示しているように、論理こそ、あらゆる言語的差異を超えた、より根本的な世界の基礎言語である可能性があるからである。その仮説が正しいとすれば、学生達の論理性や科学性のレベルの上昇、すなわちデカルト精神のアンカルナシオン（血肉化）は、真の国際人を育成するための教育に不可欠であり、そのための教材としてそれらの卒論が位置づけられることになるだろう。